

好事往還多疲、今建此一院普濟腫脹」と同情の涙を社會の下層に漲ぎ、慈眼視衆生の大
悲心に住して、世の暗黒を照さむと欲する者、是れ其の慈悲平等を旨とし、彼の大夏高
樓の上に起臥し、詩歌管絃の娛樂に生活する貴族も、破窓茅屋の裡に呻吟し、肝膏勞働
の糧に衣食する平民も、皆な同一佛性を具へ同一人類なりと観する佛教家に非ずんば、
焉んぞ能く道破し得る所ならむや。去れば院内の規律を定め教師の注意を喚起するにも、
常に此の趣旨を専らとし、彼の道人傳授の段には「法師心住四量四攝不辭勞倦莫看貴賤」
と訓諭して佛教々師の生徒を視るや、常に佛陀の大慈悲心に住すべきを示し、俗博士教
授事の條には「絳帳先生心住慈悲、思存忠孝不論貴賤不看貧富、隨宜提撕誨人不倦」と切
に説示する處あり、而して此を總掣するに「三界吾子大覺師吼、四海兄弟將聖美談」な
りの兩句を以てせらる、奈んど夫れ一視同仁の情に厚きや。
要するに高祖が斯院設立の意思は、僧侶が各自障壁を築き宗派的城郭に割據し、絶て眼
光の其他に達せざる弊習を打破し、衆藝を兼綜し三乘に通達し、寛雍優和の精神を以て

外道異教を自家藥籠中の一物と視做し、決して其學の一方に屈執すべからざる所以を悟
らしむると同時に、俗者に對しても同じく、空濶の思想を養成せしめ、兼て學問智識を廣
く、上下貫賤に普及せしめんづ希望なりしや知るべし、其眼光氣宇の宏遠濶大にして其思
想の博愛的なる、彼の眞言行者若し他部を學せば既に、魔境に墮落せる者なり等と唱導す
る、曠々者流の得て付度する所ならむや。吾人は到底高祖の兼綜衆藝に企及すべきに非ず
と雖も、努めて志望を是處に存せずんば、大日普門の萬德に達し、宇宙的大光明に攝取
せられて、摩訶毘盧遮那の本體に冥合すべき、眞言行者の大氣宇大度量に缺くる者なるや
必せり矣。輪王の兒は幼より輪王の氣宇を備へ、獅兒は三日にして既に猛獸を搏するの概
あり、自から好んで眼光を豆大にし思想を桎梏にし、氣宇を藩籬の内に限る者、豈に得て
佛陀の覺位に登るの資格あらむや。吾人は初より其完全に達し難きを知ると雖も、爲に
毫も其志望を縮少すべきの必要を見ず、宇宙は廣し虚空は大なり、豈に徒爾に其範域を
制限するの愚を學ぶべけむ、彼の學生の能力、限有るの所以を以て、遠大の希望を抛擲

するが如きは、俱に以て語るに足らざるなり。嗚呼宇宙を望む者にして初めて一大洲を得べく、一大洲を望む者にして初めて一國を得べく、一國を望む者にして初めて一道を得べく、一道を望む者初めて一洲を得べし、元就の言實に吾を欺かず、心や小なるべく膽は大なるべし、吾人は到底、高祖が空海と呼稱されたる、本意の存する所を奉體せざる可からざるなり。

加之終に、師資糧食事の條に「夫人非懸瓠孔丘格言、皆依食住釋尊所談、然則欲弘其道必須飯其人」と云へる者眞に、社會的人情に富玉ひし高祖の眞面目を發揮し、他の魔裝的劣念を抱ける俗僧が、心に思ふて口に發するを憚る所を公言し、洒々落落天と俱に語り、地と俱に談じ、其の心を高遠幽玄の絶對境に遊ばすと同時に、又極めて卑近なる世俗的觀念を遺忘せざる大人物の、社會的性情を直顯したる者と云ふべし、嗚呼朝廷百官の間に法を説き、宮嬪侍御に道を教へ、商賈農工に救済の手を垂れ、今又少年子弟の教育に意を任ね、而して毫末も世の塵俗に染まらず、清水に咲ける純白の蓮華、陽光に照れる瓊花の色、月

夜に開ける寒梅の香、心は九天の上に在りて情は地上の迷兒に宿る、高祖の如きは實に當今の佛教家が、奉じて以て標準理想と致すべき大偉人に非ずして何ぞや。

然れ共惜い哉斯院、高祖の御入定と共に、其志を嗣ぐの人物に乏しく、當時に於ける或人の難詰を實にし、備僕射の二教、石納言の荒亭と其運命を同くし、遂に承和十四年斯院を治却して、東寺に於ける傳法會の資料と爲すに至りしを、嗟呼物の興廢は全く人に由り人の昇沈は定めて道に在り、道の學ばざるべからずして、而も荒廢し易き者は是に過ぎたる無し、歎ずべき哉。

今茲高祖の姪圓珍智證大師、十五歳にして京に上り、叡岳義眞の下に僧と成る、吾人は何故に此の寧馨兒が、高祖の下に誘致されざりしやを切に怪む矣。

六年己酉は別に、爰に詳述を要する底の大出來事を見ず、唯だ元興寺護命僧正八十の賀を祝せんため、九月二十三日、茶湯の淡會を東大寺に設けて醍醐の淳集を期し、且つ其が壽詩并序を作りて、寧樂佛教の宿老を頌贊せられたるが如き、當時高祖が奈良諸高僧と

如何に、親密の關係を把持せられたるやを説明して餘ある者、其の十一月五日勅して大安寺別當に補任せられ給ひし、素より舊師勅操和尚の遺跡たるに依ると雖も、亦此等親切の關係存せしに依らずんば非すと信ず。

七年二月曩に、宮中を出で、攝州六甲山に隱遁せられし、天長帝の妃如意尼の爲に密灌を授け、且つ其の如意輪觀音像の彫刻を助けらる、四月 勅して諸宗の宗要を奉らしめ玉へる詔旨に順じ、十住心論一部十卷を撰述して獻上せらる。然るに卷帙浩論に過ぎ大意を捕捉し難し、故に後ち更に秘藏寶鑰三卷を撰み獻納せらると云ふ、眞に此二書は高祖開宗の主旨を摘み、密宗の根本説を發揮したる者にして、辯顯密二教論と相並びて、高祖の胸鏡に映じたる百億契經を判批し、蘭菊美を争へる各宗派に對して、大々的斷案を下せる者、縦介ひ其の根本思想は既に疏主の許に存したりしにもせよ、此をして秩然たる組織と爲し、嚴然彼の智者賢首兩大師に對峙する大判教たらしめしは、一に高祖の大脳髓に由らずんば非ず、久しく高雄に禪關を閉ぢて、立教開宗の準備に凝念せられたる結果は、今

や巍峨たる秀嶺と成りて、東海の表に顯はれたり。

蓋し十住心論の製作年代に關しては巨多の異説無きに非ず、或は 嵯峨帝弘仁の初と云ひ、或は弘仁十四年清涼宗論の後ち此を製し、天長初年に獻上せられたと云ひ、傳説區々一定し難き者ありと雖も、其の諸宗の宗要と俱に 勅詔に從て製作獻上せられたる者なるや疑なく、而して其の諸宗の宗要が天長七年に成れることは、護命の研神章、豐安の戒律傳來記の序等に徴して分明なり。研神章に曰く

今我朝普勅諸寺令上宗要、護命幸遇昌運久經道家、年齒八十形神衰老、雖然謹承勅旨悅撫虛懷、謹上世界問答五卷、名曰大乘研神章、于時天長七年歲次庚戌建巳月云々
戒律傳來記に曰く

同百濟傳日本(中畧)從磯城島天皇即位元年法外十三年歲次壬申始至于法内天長七年歲次庚戌合二百七十八年佛法興隆於倭國云々

此等の明鏡了然たるが故に、其れと同趣意より製作せられたる、十住心論の著作の今年に

在ること言を待す。當時法相の護命は彼の大乘研神章五卷を、天台の義真は義集一卷を、律宗の豐安は戒律傳來記三卷を、三論の玄叡は大義抄四卷を、華嚴の普機は一乘開心論六卷を奉撰し、各自其の宗要を演述せらるゝ雖も、到底高祖の思筆兼ね備はり、汪洋たる萬頃深流を容れて溢れず、横に宇宙萬象の眞理を盡し、豎に人心開發の階段を示し、乾坤を該羅し心府を窮極し、住心相續の次第、轉迷開悟の順序を概括して、無漏精進道の徑程を明示せられたるに比すべくも非らず、即ち彼の諸師等は祖師開宗の本意を案じて、單に此を祖述するに留まると雖も、高祖は自ら立教開宗の大抱負を以て、我より新紀元を開かむとせらるゝ者、其の地軸を震ひ、天柱を動すの大轟響を、我宗教界に起したる者豈に偶然ならむや。

然れども茲に注意を要するは、高祖の著作が三教指歸の外、毫も著作年月を記さず、且つ其の思想も、彼の文學者が當時に抱ける感想を直に、筆鋒に托するが如きに非ずして、既に久しく構成し、蘊蓄せられたる思想精神が、外縁に觸れて忽然、其の光芒を發するに過

ぎざること是なり、既に今の十住心論秘藏寶鑰に顯はれたる思想の如きも、永く胸裡に涵養せられし者と見ゆ、弘仁十四年頃の記文と考へらるゝ奉爲 嵯峨太上天后灌頂文に於て、此と同思想の一端を瞥見することを得るなり。是の如く高祖の著作は其製作年月を記さざると、縦合ひ記載するも、其書の記載する所を以て直に、其時代の思想とのみ断定すべからざるとは、大に高祖の性格と思想と、兼て其の變遷を窺ひ参らす上に於て、最も吾人の遺憾を覺ゆる處にして、高祖が數百卷の御著作も、其思想轉化の徑路を卜知するの便を與ふること殆んど是れ有らず、加之ならず其思想の條路を探り、其の歴變昇轉の跡を批評するが如きは、最も祖師の尊嚴を傷くる者と信せられ、此を神靈視するの結果、遂に白壁の微瑕をも強辯し、兼て人間的性情の活現と、有漏智の窺入とを以ての御著述より排斥し去らむとす、是れ決して高祖の御素意に契合する所以に非ざるべし、吾人は三地薩埵の遍照尊を拜すると同時に、空海上人の事蹟を考へ、即事而眞當相即道の密意を、高祖の事業と教學と思想との、所有る方面より看取し來りて、世に所謂國家的社會的宗

教の精神を、高祖の上に得んことを望むや切なり。

吾人は今や終に臨み、高祖の精神的物質成功の跡を顧みて、成功時代の結尾と爲さん、見よ、高野山の造營は着々其歩を進めて、彼の都率の内院に擬へたる金堂、及び南印度の鐵塔に擬へたる、大塔の建築も俱に略は其功を了へ、東寺は教主護國寺と成りて、永世眞言密宗の道場と定まり、入唐請來の佛像、經論資具を斯院に安置し給ひて、一宗の長者寺と成り、高祖が最も久しく住居して、名聲を朝野に振ひ玉ふに至りし根基たる高雄山は、和氣氏の奉囑に依りて神護國祚眞言寺と改り、十住心論寶鑰等の御著作ありて、眞言宗の教義判釋確立し、綜藝種智院成就して人物養成の端緒立ち、門下の龍象は各々秘奥を學習して傳燈の任に當るに足り、上は一天萬乘の君を初め奉り、下億兆萬民に至るまで、高祖の徳に懷き恩に服し、一需の法雨に渴仰の念を醫せんことを、尙ほ赤子の母に於けるが如し、是に於て高祖の功業は既に圓滿完成の域に達したる者と云ふべきなり。

第六章 退隱時代

其一 御入定以前

畢生の希望は業に已に其の全きに達し、精神物質兩界に於ける成功、また遺憾なきに幾し、是れ高祖が今日までの經歷にぞある、是に於てか退隱時代の舞臺は旋り來りぬ、是よりさき天長八年六月十日惡瘡に苦み、表を捧げて大僧都を辭し玉ふ表中、伏請陛下賜顧臨終之一言不棄三密之法教生々爲 陛下之法城世々作 陛下之法水云云の語あり、其の當時自ら窮命の疾病たるを疑はれたるや知るべし、然れ共帝慰諭して許し玉はず、病思も亦尋で去りしと思はる、八月十五日太神宮啓白の文を制し玉ふ中に、夫神明之元旨基陰陽遮那之本誓起自胎金文又曰く如來身密舍利、如來語密經卷、如來意密神明也云云、以て兩部神道の思想が如何に發達し圓熟しつゝありしやを知るに足る、九月二十五日叡山寂光大師圓澄を初め、徳圓、南覺、玄邊、戒圓、治俊等、最澄師の遺弟三十六人、連署して受法灌頂を請ふ、山門の胎藏業是に於てか興起すと云ふ、

九年正月十四日最勝講竟て後ち、紫宸殿に於て護命、修圓、豐安、明福等と論議のことあり、二月三月は高雄にありて秘密の法要を眞濟師に授け玉ふと云へば、其上半期は京都に留住せられきと思はゆ、後半期に入りては漸く塵寰を厭ふの念深く、遠く南山の烟霞に隠れて、三寶島の幽聲に禪定の耳を澄し、消々たる溪流に持念の心を洗ひ、松籟に吟嘯し、林泉に逍遙し玉ふ、八月諸弟子等と萬燈會を高野山に創修して衆生の迷塗を照し、十一月以後全く穀味を斷じて専ら禪定を好み、是れ令法久住之勝計爲末世後生弟子門徒等也と曰玉へり、彼の後夜に佛法僧鳥を聞きて

閑林獨坐草堂曉、三寶之聲聞一鳥、一鳥有聲人有心、聲心雲水俱了々、
の吟を殘されたるも當時にやあらむ。

天長十年三月 淳和帝位を皇太子正良親王に譲りて西院に移り給ふ、兼に諸弟子の穀味を勸むるに答へて、已有涯不可強留唯待盡期若知時至必先入山云々と、厭世の情を漏し玉ひし高祖は、俗塵を厭はるゝの餘にや、踐祚を祝し奉ること 淳和の即位に於けるが如

き賀表を見ず、以て過去十年間に、如何計り高祖の思想が、出世間的傾向を取りたるか、又其の社會的位地の如何計り、變遷せし乎を説明して餘あり、斯の如く高祖は深山に退棲せらるゝ雖も、諸方の音信來訪は毫も其跡を絶たず、太陽の諸星を引くが如く、爐火の衆人を致すが如く、人々其の音容消息に接して温き信仰と、静けき安心を得むことを庶幾ひ、清原修理亮の經史を寄せて、禪林の閑を慰するあり、紀伊國司藤原藤嗣の筆跡を請ひ來るあり、藤原三守の禪衣等を寄贈するあり、又良相公の桃李を送り、且つ高祖の山居を惜みて

問師何意懷玉隱山、半履障石上下行難、魑魅爭食居孔不康、忘歸樂之誓死守飢無益取
貽、伏乞省之願將下山有利人天云云

の詞あり、高祖即ち報するに五言詩一章、雜體歌三篇及び、羅皮函詞を以てせらるゝ、入山興、山中有何樂、徒懷玉等是なり、詩趣津々無量の興味ありと雖も、皆長ければ唯其の最も短き者のみを示す、五言の詩に曰く

孤雲無定處、本自愛高峯、不知人里日、觀月臥青松、忽然開玉振、寧異對顏容、宿霧隨吟斂、蘭情逐詠濃、傳燈君雅致、余誓濟愚庸、機小多醜濁、金波不易從、飛雷猶未動、螢蚊匪開封、卷舒非一己、行藏任六龍、
と其の蘿皮函の詞に曰く

南峯獨立幾千年 松柏爲隣銀漢前 戴日蘿衣物外久 函書今向相公邊

と高祖が當時の境遇、寫し得て清透なりと謂ふべし。承和元年御年既に、六十一歳の齡を重ね玉ふ、而も又勅に起されて正月後七日の御修法を中務省に行ひ、後ち十一月上書して永世の國式と定めらる、後七日御修法とは正月八日より一七日間、玉體安穩國家安寧の爲め、眞言宗解法僧十四人、沙彌十四人を擇びて、修行せしむる祈禱にして、今年高祖初めて此任に當り玉ひしより、勘解由司廳を賜ふて宮中眞言院と定め、堂舎を構へ本尊を祭り、年中行事、僧衆威儀、皆な大唐青龍寺の風を移し、爾來年々絶ゆると無く、眞言一宗の長者、大阿闍梨と成りてこれを修し、至極嚴重の法會なりしが、明治四年宮中の修法を止

め、今は京都東寺灌頂院に修せらるゝ處なり。

其他毎月十八日、觀音供を仁壽殿に修行し、晦に臨む三日、「晦の御念誦」を行ふ等皆な永世の式と成れり、彼の神皇正統記に「我國は神代よりの緣起此宗の所説に符合せり、此ゆるにや唐朝に流布せしは暫らくのことにて、日本にといまる相應の宗なりと云ふ理り、にや、大唐の内道場に准じて宮中に眞言院を立つ、奏聞して毎年正月此所にて御修法あり、國土安穩の祈禱稼穡豐饒の祕事なり、又十八日の觀音供晦日の御念誦等も念に取りて深意なるべし」とある是なり高祖の餘光も亦大なる哉。

三月親から實惠、眞濟、眞雅、道雄、眞然、圓明、の六弟子を率て叡山西塔院の供養會に赴き、五月重ねて遺誡の文を製せらる、其の

上下無諍論長幼有次第、如乳水之無別護持佛法、如鴻雁之有序利濟群生、若能悟解已、即是佛弟子、若違此義即名魔黨」と云ひ

長兄以寬仁調衆幼弟以恭順問道、不得謂賤貴」と言ひ、酬四恩之廣德興三寶之妙道」

と云へるが如き、以て高祖の世間的道德に對する御意向と、佛教者の世間に處する觀念とを寫し得て適切なりと謂ふべし、十一月豫め入定の期日を告げ、東寺を實惠に、高雄山及び眞言院を眞濟に、高野山を眞然に付嘱し、滅後の諸弟子皆な、實惠僧都の指示に従ふべき旨を教諭し玉ふ。

承和二年正月、今生の思出にもや有りけむ自ら御修法の任に當らる。此時宮中金光明會殿上の論議者十口の外に眞言二口を加へ、永く恆例と爲すの勅宣を下され、又七宗の例に準じ年分度者三人、即ち金剛頂經業一人、大日經業一人、聲明業一人を賜ふ、三月十五日入定の期迫て、更に諸弟子を集め、教誡を施すこと丁寧懇懇にして、親ら二十五個餘の大事、并に高野住侶遺記等數本を書せらると云ふ、即ち身を高野の奥に留めて遠く、五十六億七千萬歳、龍華三會の曉を期し玉ふ、何んぞ其志の大にして其言の偉なるや、今其の誓願の重なる者を舉示せば

我れ日々化を下して遺跡の影向を闕かず加持護念して縁を繋がむ云云。

山若し陵廢に及ばば禪定の中より正法を興立し修行利人退失無からしめん。

我が滅後の門徒百千ありと雖も、師は凡て我れ一人に歸す、道場千萬ありと雖も高野を根本とす。

我後生の門徒縱令ひ我現相を見ずと雖も、我が形像を見る毎に眞相の想を生じ、我が教を聞く毎に我言音の思に住せば、我れ定慧の力を以て攝取して捨てず。

縱令ひ直に詣せずと雖も、杳に念じて我山に向ひ、一花一香一體一念、淨心に恭敬を爲せば、此因をして大果を結ばしめん。

我山は國城の大鎮なり、金輪南面の徳を鎮めて賢祚萬歳を誓ふ、峯は天下の南に在て衰げず崩れざる者なり云云。

遺教既に終り堂に入て靜坐す、晝夜四時の行法時を失ふこと無く、諸弟子等をして彌勒の法號を念誦せしめ、三月二十一日寅刻入定の時至り、四衆禪床を望むに定相宛然として眼を閉ぢ、禪相更に動かず印座また散せず、威容平生に異ならざりしと謂ふ。齡六十

二歳夏臘四十一なり、世人の如く直に葬送せず嚴然として安置し、唯だ世法に準じて七々日の忌明を修するのみ、諸弟子顔容を拜するに神色衰へず、鬢髮更に長ず、因て剃除を加へ衣裳を整へ、定體を石窟に奉じ上に、五輪の卒都婆を立て、これを奉表す、高野山奥之院の御廟是なり（定力に依りて呼吸を止め禪氣内に充實せば身體永く腐爛すること無しとは印度人に於て既に堅く信せられたる處にして佛教内にも亦然りしなり）
 太上皇 上皇以下后宮に至るまで、皆な使を以て弔慰し、賻を贈らしめ玉ひ、朝廷の職務三日に至ると言ふ 太上皇の弔書に曰く、

眞言法匠密教宗師、邦家憑其護持、動植荷其精念、豈圖峻嶽未迫無常遽浸、仁舟廢棹
 弱子失歸、嗟呼哀哉、禪關僻左、函問晚傳、不能使者奔赴相助茶毘、言之爲恨、悵悵
 曷已、思付舊窟悲涼可斷、今遙寄單書弔之、手錄弟子、入室桑門、悵悵如何、兼以達旨。

上皇又九御製の詩一章を賜ふ

得道高僧水玉清、乘杯飛錫度滄溟、化身住世何能久、塵界空留慧遠名、緇侶古來以爲
 樂、凡夫徒自感傷情、戒珠俄爾沈逝水、心印付誰雲嶺行、遺草能誇王坦駿、舊章寧謝
 馬長卿、蓮宮猶擊羅浮磬、香閣無翻貝葉經、歲晚禪林搖落○、涼天苦月照墳岡、從此
 津梁長已矣、魂兮何處救蒼生。

と上足の弟子實惠上表して恩を謝す、嗚呼生きては三代の國師と成り四海其慶慈を仰ぎ、死しては天書谷に入て空山光を吐く、天下のために祈禱すること前後五十一回、灌頂の弟子上下萬を以て數へ、傳法の遺弟自他宗に通じて數百人の多きに及ぶ、著はす所の書籍密軌凡そ二百卷、自他のために草せし詩文性靈集十卷、高野雜筆二卷あり、繪畫彫刻筆跡の遺品に至ては天下に遍ねく、其の研究また各其道の専門家を煩はさるべからず、加之ならず其間に在りて、西は大唐長安より南は南海の邊岸を極め、東北は奥州越羽の境に及び、餘光赫々として年と俱に盛なり、誰かこれを偉ならずと謂はんや。高祖の如きは實に世界的人物なりと言ふべきなり

其二 入定後の餘光

承和三年眞濟、眞然兩師、遣唐使藤原常嗣、小野篁等に從て入唐の道に上る、實惠諸法弟と誓を托して、高祖の示寂を青龍寺惠果和尚の墳墓と、諸の同法侶に示し、兼て信物を送る、然るに海上暴風に遇ひ、師等乗る所の船覆没して、同船の輩百三十人皆な漂蕩して其跡を知らず、兩師海上に漂ひ、南嶠人の救助を以て蘇生することを得、送られて京に還る、四年に至り圓行律師唐に入り長安青龍寺に達し、二年を経て義眞圓鏡等の答書を齎らして歸朝す、法琳寺常曉も亦承和五年五月入唐して、揚州の棲巖寺灌頂阿闍梨文際和尚、并に花林寺元照座主に就て、眞言并に三論の教義を傳へ、太元帥明王の秘法を得て翌年歸朝す、後ち貞觀四年に至り眞如親王の、宗叡禪念と唐に渡り玉ひしあるも、親王は遂に印度に入らむとして中途に薨じ玉ひ、宗叡また早く歸り、彼の天台の圓仁圓珍の如く、先師を壓倒する底の大人物出でざりしは遺憾の至と云ふべし。

天安元年文德帝の朝に至り、眞濟の奏請に依りて大僧正を贈られ、貞觀六年法印大和尚位を賜ふ、當時高祖の實弟にして愛資たりし眞雅は、清和天皇の護持僧として寵遇比ひなく、藤氏一族の歸依非常なりしが、其の元慶三年正月寂に入るや、清和も亦太甚だ世を墓なみ玉ひ、殊に外戚の戚に依りて、皇兄惟喬親王を凌越したるを悲み、五月八日又圓覺寺の山莊に入りて出家剃髮し玉ひ、頭陀に事よせて京畿の名山佛跡を巡歴し、丹波國水尾山に入りて終焉の地と定め玉ひ、是より酒酢鹽豉を御せず、四年十二月四日結跏趺坐、手に定手を結び、奄然として崩御し玉ひぬ、其後昌泰三年に至り、宇多上皇亦落髮して金剛覺と號し宗理と呼び、眞言宗傳法の阿闍梨と成りて、御室仁和寺の基を開き玉ふ、兩帝俱に是れ高祖の德化に歸し、其餘光を追ひ玉ひし者にして、是を政治家的に批評せば、或は非難すべき所あり、遂には引て累を大師に及ぼすを知らずと雖も、顯貴の間に此の薫化を興へたる高祖の餘德は、又大なりと言はざるべからず。

延喜二十一年十月二十七日に至り時の東寺長者、權大僧都觀賢が、先に上表請願せる旨を許し、左の繪旨を賜ふ

勅、琴絃已絶、遺音更清、蘭蕙雖萎、餘芳猶播、故贈大僧正法印大和尚空海、消瘴煩
惱、抛却驕貪、全三十七品之修行、斷九十六種之邪見、既而佛日西沒、渡溟海而仰餘
輝、法水東流、廻陵谷而導清浪、受密語者多滿山林、習真趣者自成淵叢、況 太上法
皇既味其道、追憶其人、誠雖浮天之波濤、何忘積石之源本、宜加崇飾之典、益弘法大
師云々

と最澄は既に貞觀八年に傳教大師の謚號あり、然るに高祖は漸く今日に至て此の謚ある者、これ或は當時眞言宗の勢力天台に及ばざる者あるにあらざる乎、尙舊記の傳ふる所に依れば、是より先き延喜十二年孟春高祖、醍醐帝の御夢に入りて 高野の山結ぶ庵に袖打ちて昔の下にぞ有明の月 の詠を奏し衣裝を賜はるべき由を告げらる、是に於て、帝檜皮色の衣袈裟一襲を調へ、觀賢僧都 勅使大納言藤原扶闕と共に、此を奥の院の石額に奉せしめられ、頭髮を剃除し、衣を改めて此を恆式とし、今に至るまで毎年三月二十一日御衣更の式あり、嗚呼南嶽の法燈赫々として今に輝き、皇帝后妃諸親王にして、

高祖の流に浴し灌頂を受け玉ひし者其の幾許なるを知らず、佛教と皇室との關係は、換言せば眞言宗と 皇室との關係なり、委細は大日本國教論に在り、尙高祖の教義が最も能く宇宙的大宗教たるの性質を有することの如きは、乞ふ題を改めて論ずるの時あらん

第七章 結論

吾人は今や、高祖の御傳記一斑を描き來りて一轉回顧すれば、轉た驚くべき一致の其首尾に存して、一條の主義脈々始終貫徹する者あるを見るなり。然らば其の主義とは何ぞ、他無し眞俗一體即事而眞の圓融主義が、所有る方所に貫達して、其情恰も火山脈が我國全體を貫けるが如き者ある是なり。換言せば、高祖の生涯は此主義を實現するに在り、高祖の品性は此主義の發顯にあり、見よや高祖はこれがために、俗氣紛々たる世上の塵事と、清高經逸の修禪とを併せなして辭せられざりしにあらざるや、又差別現象の事法を外にして、平等實體の眞理を求むるの、或へるを説き玉ひしに非ずや、又彼の煩惱の犬高く吼ゆ、意馬心猿の狂躍するなる動物的欲情をも、曼荼の莊嚴と開見するを憚られざりし

にあらざるや。此主義に養はれたる廣大の品性は、世界の所有る宗教學術を一心の鑄鑪に入れて、一大組織に鑄治するの大精神を鍛鍊したるに非ずや。要するに高祖が人生を見ること優雅に、他教に對して寛大なりしは、畢竟此の主義の爲なり。故に吾人はこれをして、高祖の全生命とし、全精神とし、全教學とし、永劫不滅に四海を光被するの光明たるを信する者なり。

或人曰く、弘法は釋迦より出で、釋迦も大なりと、吾人は此語が、景慕の餘りに出たる讚頌たるを知ると雖も、亦真理の幾分を道破したる者なるを許さずんば非ず、其思想や汪洋として、百億の教義を包容すること大海の如く、抱負の廣大無邊なると太虚の如し、高祖門徒に告て曰玉はく、釋迦の教は正法千年、像法千年、末法萬年の後は、遂に五濁惡世の機根を濟度する能はず、法藏比丘因位の誓願、他力の方便も、其後淺許かの年載に及び得るのみ、然るに前途を望めば、後佛彌勒の出現は、遠く五十六億七千萬載の曉に在りて存し、其中間に於ける幾千萬億の衆生は、耳に法音を聞かず、眼に佛陀を拜

せず、邪見益々募り、罪業彌々深く、我慢益々強く、心品彌々下劣にして、何者か能くこれを救濟せん、我れ今二佛の中間に生れ、幸に不二の眞乘に遇ふ、願くは定身を高野の奥に留め、秘密甚深の加持力を以て、其の便り無き迷徒を濟度し、慈尊の下生を待ちて、俱に再び此世に出で法輪を轉せん」と。是れ高祖が定身を高野山の石窟に留め、神を都率の雲上に遊ばしめ、龍華三會の曉を契期せらるゝ所以なり、何んぞ其自信力の爾く強く、其抱負の爾く大なるや。蓋し是れ高祖が、我與伊勢同體なりと公言して憚られざる所以にして、區々一時代の人物を以て自ら居らず、宇宙の品類を該攝して我體とし、世界の永遠無窮を生命として、天地に長嘯し、乾坤に呼吹せんとする所以なり、何んぞ夫れ偉なるや。

古來史家の事を録するや、常に舞臺の表面に顯はれたる華麗の事柄にのみ注意し、其の樂屋内に於て對話し、起臥し、喫茶し、散步し、愛兒を撫し、讀書を樂しみ、春海洋々たる胸裡。怒濤澎湃たる心象の起滅、抑揚如何を録せず、爲めに最も偉人の品性を窺知

すべき、言行の仔細を見るの便を缺きたるは、洵に遺憾の極とする所、今高祖に於ても亦其の爾るを見るなり。抑、高祖が二十二歳東大寺の受戒より、三十二歳久米寺得經に至るまで、前後十有一年間、一心不亂に佛語の不妥と、自己の天職とを確信して、志望愈々堅く、我れ若し此經を得ずんば一切衆生畢竟成佛せず、我れ亦成佛せずとの信仰を抱きて、十年一日の如く四方に周遊して、祕密の經典を尋求せらる。其思想の堅固なる、信仰の不動なる、到底以て常情の能く付度し得る所に非ず、吾人は此の厚き自信と、堅き意志とを以て、高祖の性格の主要なる者とし、是れを高祖が獅子奮迅の大勇氣を振つて、神密の法教を我が日域に傳へられたる、根本元機と斷言する者なり。

然れ共これにも勝りて、尙は顯著大偉なる高祖の性格は仁愛なりと云ふべし。傳に曰く高祖七八歳の時、獨り郷里の倭斯渡山に上り、諸佛に誓願して曰く、我れ若し今生に成佛して、一切衆生を濟度するを得べくば、諸佛菩薩幸に温容を示現し玉へ、若し能はずんば一身を捧げて諸佛に供養せんと、即ち峻崖より谷底に投ずるや、天人忽ち降りて空

中に抱き留む、斯くすること三度びなる時、教主釋迦牟尼佛、紫雲に乗じて虚空に現じ、其願の空しからざるを告げらる、高祖童心にも密かに其願の成就を悦び、益々勇猛の念ありと。又以て高祖の性格が、如何に世人に感取せらるゝ乎を推知するに足る、想へ高祖が一切衆生の成佛を希望して、一切俗界の快樂を放擲し玉ひしは、仁愛の大なる者に非ずや、天職の重きを信じて、自から任ずるの大なるは、又仁愛の念に驅られ、一切衆生の救済と、改善とを目的とする者ならずや。實に此の仁愛の徳は、高祖が萬言萬行の源泉にして、平等的眼光を以て、一切衆生畢竟成佛すと照見し、其成佛のために、永久の生命と一身とを捧げて、遠く三會の曉を期せらる。吾人は此の性格に於て、高祖が凡ての行爲の動機を見る、夫の高祖の道德説が、利他的快樂説に似たる者ある豈に偶然ならむや。

吾人は以上高祖の性格の著大なる者を見たり、諸ふ今より少しく歩武を轉せしめよ。ヘーゲルは其辨證法に於て、常に三段的進歩を以て、凡て思想の開發を説明しぬ、吾人

は高祖に於て、又其の傾向著しきを見るなり。蓋し思ふに此の階段たる、直覺的に宇宙の祕府を開顯せんとする異人物が、最も多く撰擇する逕路にして、從て論理的に思想の順路を踏登る西洋學者よりは、直覺的に齎進する東洋學者に多くこれを見、智識研究を目的とせる哲學者に少く、情意を根底とせる美術家、詩人、宗教家に多く存する所なり。今所謂る人生觀を以て此を例せん乎、初め卑俗なる肉食の快樂に貪着せる貪世の境遇より、進みて一段高尚なる厭世的觀念となり、而も益々精神撓まざる輩に在りては、遂に進みて樂世の境界に達し、俯仰逍遙毫も外物に凝滯せず、現在の境界を厭捨するの狹を爲さずと雖も、亦これに貪着するの陋を爲さず、洒灑滑脫圓轉宜しきに從ふの心地に進みては、皎々たる心月廓朗として、雲霧の敢て其光を障ふる者あること無し。

今高祖に就てこれを觀んか、高祖が常に世俗の常識を基點として、或差別見を假想し、其の決して取るに足らざるべきを言てこれを捨遣するや、進みて無差別絶對の平等觀に入り、遂には尙ほ進みたる差別平等一致の觀地に到達せらるゝを常軌とす。換言せば、

俗諦より進みて眞諦に達し、眞俗の區別歴然二致なるを覺りて、諸法平等の眞理を開顯すと雖も、是れ未だ平等に執して、惡平等の偏見たるを免れず、故に更に一步を進めて、眞俗二諦二而不二の道理に契達し、思想の循環によりて、原初の俗諦門の差別相、直に是れ眞諦の實相なりと認識するに至るなり。勿論斯の如き思想の循環は、決して高祖の獨り擅にし玉ふ所にあらずと雖も、未だ高祖の如く其思想の條軌を明了にし、意識的に其思想を、所有る教義と實行との上に現示せられたるを見ず、彼の六大緣起説が、物心二元より出立して色心の二法は全然差別せる者と爲し、者、忽ち進みて色心不二の觀智となり、大日如來の一法身に於て、其平等的總合を認めたりと雖も、而も其の所謂る大日如來を理智二法身と分ち、先に色と云ひ心と云ひ、唯だ原質的體性たりし者、今は一層高尚なる者、生命ある者、活動ある者、具體的なる者と化し、遂に宗教的歸依體たる、金剛界智法身、胎藏界理法身と成りて、因果を表し、始覺本覺を示し、其德相を開顯したる曼荼羅莊嚴の上に於ても、亦各々別々なる者あり、是れ豈に思想の三段的開發に非

すして何ぞや。

請ふ吾人は且らく進みて、これを高祖が一生の行路に見奉らむ乎、夫の初め佐伯氏の家を出で、俗界を脱し、家族と俗累とを以て、凡て修道の繫縛障礙と考へたりと雖も、遂に進みて眞俗不二の觀地に達するや、先に我が一族を捨て天下の同胞を顧さざりしもの、是に忽ち宇宙的大家族を打建て一切衆生に赤子の觀を起し、小煩累を捨て、大煩累を設け、無量無邊の衆生と共に無上の樂果に達せざんば止ざらむとす。即ち其小を捨つるは大に至らむが爲なり、其一身の我を萬類の我と冥合せしめ、無我の自我に契達して、千品萬類、各々其の本有佛性を開發せしめんとする、是れ高祖の本意なり。要するに是れ、一旦浮世を出で、又浮世に立還りたる者にして、唯た其の後の浮世は、密嚴華藏の佛世界と開見したる、娑婆即寂光の忍土なるのみ。

吾人は爰に一言、哲學者としての高祖の位置に論及せば、思索的人物乏しき我國に於ては、優に哲學者の優なる者、大なる者に算へらるべしと雖も、到底眞の哲學者と稱すべ

き仁に非ず。其所以は吾人は、高祖の手に成れる密宗の教相に於て、顯教以上の幾多の思想を見ると雖も、根本的新思想を高祖の上に看取する能はず、彼の六大論と云ひ、十住心論と云ひ、其他あらゆる哲學思想は、金剛頂經、大日經、釋摩訶衍論、菩提心論、大日經疏等の説を取りて、秩序と系統とを其れに與へ、龍猛、不空、善無畏等の立説を相傳し、打て以て一丸として、一種の有機的組織を試みられたる而已。思ふに是れ由來密宗の教義が、現在の實行的にして、巧妙幽玄なる學理的講究に馳すべき性質の者に非ざると共に、高祖が又専ら智識の人にあらず、寧ろ情意の人として、宗教者、文學者、美術家たるに適し、書齋の人たるよりは、常に社會の人たる傾向を有せられしが爲なるや必せり。故に其想を哲學的思索に費すや、單に宗教的安心の基礎を横たへ得るの範圍に留り、其教相の華は、事相の果實を結ばしむるの程度に出でず。去れば彼の廣大なる思想を以て、宇宙内外の宗教を、一系統の下に槩括するの大規模を立てられ乍ら、惟だ比較的研究を、僅々儒教の五常と佛教の五戒との間に試みられたる而已、道教の如き漢

羅門教の如きは、遂に精細緻密なる批評に接する能はず、且つや能寄齊眞言行者、住心轉昇の次第と、所寄齊顯教の諸教轉深とに就ても、到底學者を満足せしむるに足るの説明を得ず、其他文學彫刻繪畫等に於て、精微巧妙悉く驚べき天稟を具へられ、其眼光手腕能く、宇宙の祕を開き、神を顯はし、以て不可思議境を直覺するの洞察力を有せられしに拘はらず、曾て一言の美術論に接するを得ず、是れ皆理論を敢て重要視せられざりし證據に非ずや。

蓋し高祖に於ては、一切衆生の成佛なる者、是れ最上唯一の目的にして、凡ての觀察の機點なり、故に哲學も此の唯一の目的に達すべき方便のみ、彫刻繪畫も唯だ、佛像を刻み佛畫、曼荼羅を繪きて、清淨なる信仰を喚發せしめ、教義の深旨を圖解して、安心立命の道に資せんが爲のみ。彼の冷々たる理性的智識を以て、強て人を誘導するが如きは、決して宗教的教化の上乗なる者に非ず。凡ての心的活動を、具象的客觀的に活躍せしめ、是に對して活きたる信仰、働かざる安心を得せしめずんば止まざらむとする、是れ高祖の

本意なり。要するに、宇宙の眞理を開顯するに論理的鍵鑰を用ひ、段々層々、思想の必然をたどりて錙銖を分析し、斷案に達するが如きは、素より高祖の爲すを欲せざる所に於て、電光石火の激するが如く、直觀的に宇宙の奥底を照見し、其神祕を一擡して、眼前に躍如たらしむる、是れ高祖の本領なり、而して高祖に在りては、凡て是れ吾が定力所見の結果、祕密神通力の所照なれば、毫も誤謬無き者と確信せられたるや必せり、故に若し高祖にして、明に哲學と宗教との區別を判斷し、其位地の高下を論せられたらむには、其宗教を以て哲學の上に位せしむる、彼のヘーゲルと正反對なりしや疑ふべからず、夫の教理と云ひ、文章と云ひ、全く詩歌的高調を帯びて、高く九天の上に翱翔するが如き者、豈に偶然ならむや。

吾人は初め第二章に於て、高祖が宗教的改革者の天職を帯びて、奈良朝の末葉に誕生せられしを説きぬ、請ふ吾人をして其成果如何を見せしめよ。

抑々高祖が、將さに眠らむとする奈良朝佛教に向て、新生命を付與すべき先天的使命を

帯びられたること上の如し、然れ共改革者は、又常に新福音の傳達を意味し、菩薩の降誕は新法教を鼓吹せんが爲なり。見よ佛國の革命は、自由の新潮を世界に播らし、維新の改革は、開國進取の國是を確立したりしを。今當時高祖が帶玉ひし新福音は果して如何ん、吾人は其の鎮護國家的宗教を唱導するに在りしと、斷言するに躊躇せず。則ち高祖は今や、新舊過渡の街頭に立ちて、一方に舊佛教の積弊を一洗し、其刷新を計ると同時に、他方に新宗教の新主義を發揮して、國家的精神と佛教的組織とを調和し、神佛二體を融合して、所謂る日本の佛教を、明白なる國民的意識の上に建設し、國民的信仰の礎上に立ちて、佛教の發達上に一轉化を與へんとし玉ひぬ、而して夫の赫々たる徳光は、實に深院奥殿に潛みたる、幾多不淨の信仰を消釋するに足りしなり。

然らば其成功は如何なりし乎、吾人は遺憾乍ら、其の改革者として成功せず、(失敗と云はず)、新鼓吹者として成功したりと答へざるを得ず。其所以如何ん、曰く奈良朝の僧侶が、喙を政治上に容れたる弊害、或は宮掖の間に有したる妙ならぬ關係の如きは、高祖

と最澄師の偉大なる徳化によりて、一時其跡を絶ちたりと雖も、尙ほ其の餘薫を永久に留むる能はず、久しからずして又、平安朝宗教に於ける、一の忌むべき現象と成りたりと思はる、唯だ其の關係の直接ならず、從て其弊害の甚大ならぬを餘效とするのみ、其他宗教が政權に依頼すると、平民的ならざるとは、確に從來の一大弊害にして、其の平民的ならしむるが如きは、疑も無く、高祖の一大希望たりしに拘はらず、未だ遺弟の能く、師意を實行するの大手腕大精神を有する者無く。遂に其意を達せざりしが如き、或は僧家教育の方針を一轉せんがため、晩年に經營されたる綜藝種智院が、その寂後十二年に倒れて、能く高祖の遺旨を繼續する者無かりしが如き、豈に高祖の改革的使命は其精神感化を永久に傳へ得ざりしと稱するを否み得むや。是れ蓋し、藍より出で、藍より青き繼續者を缺き、又、桓武嵯峨の如き英邁の主頻出して、政治的經營を全くせらる無く、時勢の潰頽は、不知不識す、宗旨を驅つて、浮華優柔なる藤原時代の空氣に浸染せしめ、遂に以て其成功を湮滅したる者なるや知るべきなり。然れ共其の佛教を國家的にし、

我國體を適合せしめて、上は皇室との關係を親密ならしめ、二つの衝突せる神佛の思想を圓滿に調和して、佛教を千有餘年間、純然たる唯一國教たらしめたるは、全然、高祖が眞言の教義を輸入し、大日如來なる意義信仰を深く國民の胸裡に鏤刻されたる結果なりと謂はざるべからず。彼の親房卿が、神皇正統記に眞言宗を述べて、我國は神代よりの緣起此宗の所説と符合せりと謂へる者、蓋し千載不磨の語たりと云ふべし、爾來眞言宗が特に皇室護持の宗教として、國家の祈禱葬祭に當りし者、全く高祖の餘徳なりと謂べく、吾人は此點に於ける高祖の成功赫著たるを信する者なり。

其他教理の方面より、文學美術の方面より、又は教育家、雄辯家、能書家として、所有る方面より觀察せざるべからずと雖も、今は茲に唯だ宗教家たる高祖の生涯一斑を描きぬ、吾人豈に此の偉人を知れりと濫稱せんや、たゞ景慕渴仰の一端を洩せし而已。

聖空海尾

明治三十一年八月十日印刷
同 八月十三日發行

(定價貳拾五錢)

京都府平民

發行兼 丹生實榮

京都府天田郡西中津村字観音寺百二十八番戸

印刷者 林虎之助

京都市上京區二條通高倉東入観音町一番戸

發行所 傳燈會

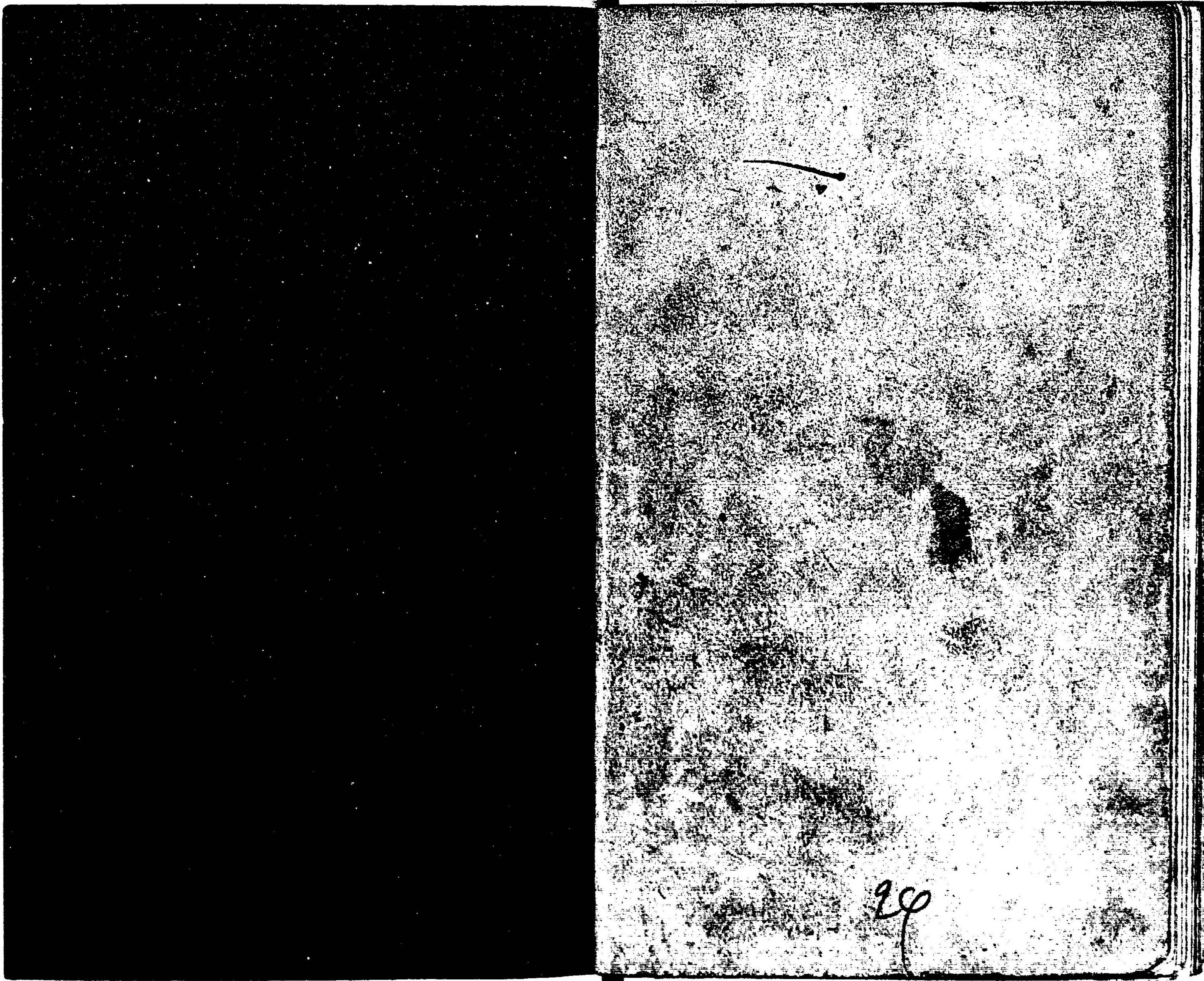
京都市京都市下京區八條町八十五番戸

印刷所 京都印刷株式會社

京都市京都市上京區柳馬場二條下ル十番戸

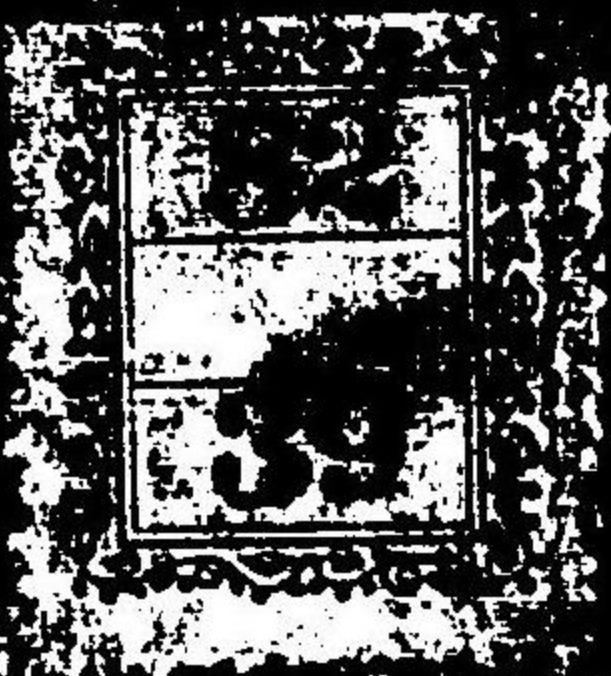
82
39











Ⓜ

017242-000-2

82-39

聖空海

丹生 実栄 / 著

M31.8

ABE-0621



